

翻訳できない言葉 田中拓也

作歌をはじめてまもない十代後半に「心の花」に入会した私にとって、「歌会」や「若手勉強会」は自身の短歌観を育む最も重要な場であった。そんな二十年以上前に出会った短歌に関する「言葉」で忘れることができないものがいくつもある。その一つが「短歌でしか表現できないことをうたう」という佐佐木幸綱先生の言葉である。「短歌でしか表現できないことをうたう」とは「言葉」だけで表現することにほかならない。私自身、その言葉を「日常会話では伝えることのできない気持ちや出来事を短歌を通して表現すること」と受け止めて作歌を続けてきたが、それがいかに難しいかということも常々感じている。

そんな中で興味深い一冊の本と出会った。ご存知の方も多いと思うが『翻訳できない世界のことば』（創元社）である。略歴によると著者はモロッコ、イギリス、スイスなど世界の様々な国で暮らしたことがある二十代のイラストレーターのエラ・フランシス・サンダース氏。翻訳者の前田まゆみ氏も『いきもの図鑑えほん』（あすなろ書房）などで知られている絵本作家。二人ともいわゆる言語学者ではない。同書も絵本であり、巻末の注記に「単語の説明は、著者独自の感性により解釈されたもの」とあるように学術書ではない。だが、抜群におもしろいのである。たとえば、スウェーデン語の「MANGATA」は「水面にうつった道のように見える月明かり」。この一語を通してスウェーデンの夜を思い浮か

べると楽しくなってくる。トゥル語の「KAREJU」は「肌について、締めつけるもののおと」。トゥル語はインド南西部の地方で使われており、トゥル文字やカナダ文字で表記されている話者二百万人たらずの言語である。ワギマン語の「MURAMA」は「足だけを使って、水の中で何かを探すこと」。ワギマン語はオーストラリア先住民の言語である。他にもサンスクリット語やペルシア語、ウルドゥー語やスペイン語など一〇八個の言葉がきれいな挿絵とともに紹介されているのである。

世界には数千の言語があるといわれており、それぞれの言語を使って日々の暮らしをしている人々がいるわけである。その背景にはそれぞれの風土があり、文字通り悲喜こもごもの一生を人々は送っているのである。言葉は日々の暮らしの中で必要に応じて生み出されるわけだから、人々の生活の数だけ言葉があるといっても過言ではないだろう。そして、言葉から生み出される「詩」も人々の生活の数だけあるといってもいいだろう。先日、イラン出身の筑波大学の大学院生の方と知り合い、「詩」について語り合う機会があった。イランにも「詩」を愛する人々が多く、私が日本の「短歌」について説明するとたくさん共通点があることがわかった。今回、この一冊を通して、世界の「言葉」と「詩」について考える思いがけないきっかけとなった。

ちなみに、同書の中では、日本語の「翻訳できないことば」の例として紹介されている言葉もある。「木漏れ日」「侘び寂び」などである。この言葉を聞いて「翻訳できるじゃないか」という方もいるかもしれないが、翻訳して一語に置き換えることは難しい言葉であることに気付くことと思う。「言葉」と「詩歌」の本質にも迫ることのできる、楽しい一冊だと思う。